

## 阿蘇地域における道路擁壁の「阿蘇らしさ」に関する観光客の評価

九州大学 学生会員 BYAMBATSOGT Arvinzaya

九州大学 学生会員 吉田高寛

九州大学 正会員 樋口明彦

### 1. はじめに

阿蘇地域は雄大な自然風景と長い歴史のある文化的風景とが共存する世界中でもユニークな観光地である。

しかし、高度成長期の急速な経済発展、都市開発などによって阿蘇の景観は大きく変容してきた。その中で観光の基盤である道路も例外ではない。一般的に日本の土木の思想の中では、道路は物理的な移動の役割を果たすものであり、景観体験の装置としての役割はほとんど意識されていない。そのため、この十数年阿蘇地域で多数の道路が新設・拡幅される中で、一部の道路を除き、阿蘇の風景と調和しない道路景観が多量に生まれていった。さらに、近年多発する自然災害の復旧事業によりこの傾向は加速しつつある。特に丘陵を切り通すことで生じる人工的・無機質な法面は景観への負の影響が大きい(写真1、写真2)。

一方で、近年では阿蘇地域の世界文化遺産登録を目指す動きが始まっており、阿蘇のユニークな風景を守る重要性が高まってきている。

観光地域にとって物理的な移動の役割を果たすものだけでなく、その地域の印象を生み出す重要な存在である道路もその対象にする必要があると考えられる。阿蘇の道路の本来の在り方について考えるには機能性と経済性を重視するこれまでの視点だけではなく、観光客の感

性がどのような道路の在り方を高く評価するかという視点を必要とする。

そこで、本研究では道路景観への影響が大きいとして道路擁壁を研究対象として選び、観光客がどんな道路擁壁を見たときに「阿蘇らしい」と評価するか「阿蘇らしくない」と評価するか、そしてその理由は何なのかを観光客に阿蘇地域に現存する観光用道路の様々な擁壁部分の写真を見せることにより明らかにする。

### 2. 研究方法

既往研究では地域や景観に対する人の評価構造を解明する様々な調査方法が提示されている。本研究では評価グリード法を参考にアンケートを作成した。本研究では、観光客にかけ負担が少なく、観光客一人に関して調査実施時間を短くするために、比較する道路擁壁の写真を9枚に選定し(図1)、その中から「阿蘇らしい」と「阿蘇らしくない」ものを選んでもらうようにした。また、写真を選んだ理由について自由記述で記録した。データ分析に関しては以下の通りである。

まずは自由記述回答文章からKJ法によりキーワードを抽出し、抽出されたキーワード群をグループ化し分類する。次に意味差異化法によって分類されたキーワードのなかから意味が対立するキーワードの組み合わせを一つの印象軸としてまとめた。そして、調査で用いた各写真



写真1 阿蘇地域・立野・国道57号線の一部の写真。  
熊本地震前の風景



写真2 阿蘇地域・立野・国道57号線の一部の写真。  
熊本地震による災害復興工事が行われた後の風景

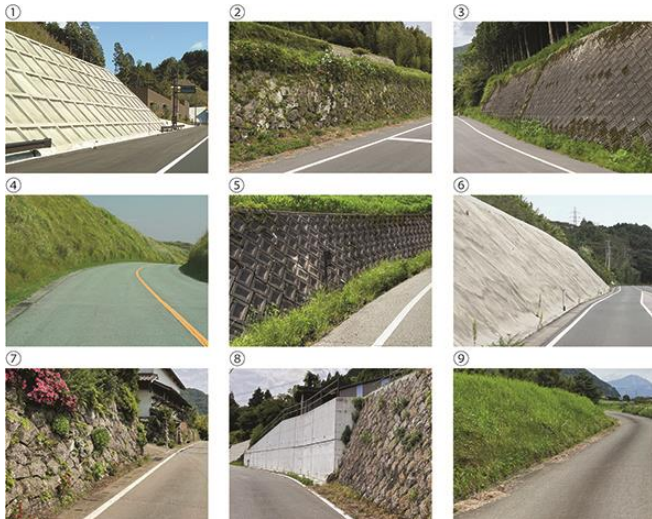
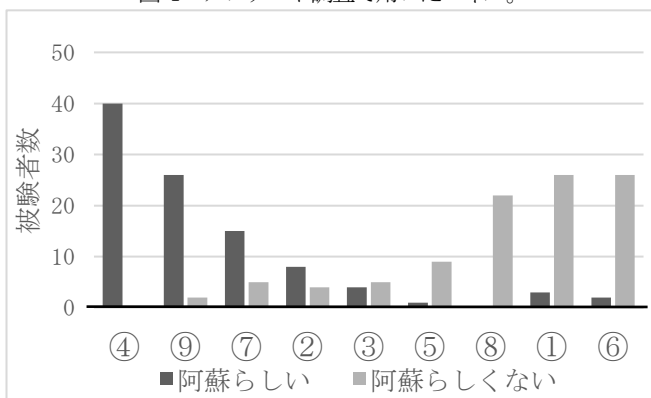


図1 アンケート調査で用いたパネル。



グラフ1 アンケート調査結果。

が印象軸のどちら側に分けられるかを分析し、観光客が「阿蘇らしい」又は「阿蘇らしくない」として選んだ写真に共通する印象の構造があるかどうかを明らかにした。

### 3. 研究結果と考察

#### 3.1 「阿蘇らしい」と「阿蘇らしくない」擁壁の比較

アンケート調査の結果、観光客が「阿蘇らしい」と思う道路擁壁と「阿蘇らしくない」と思う擁壁の種類がはっきり分かれていることが明らかになった。観光客は「阿蘇らしい」道路擁壁として「自然な感じがする」、「昔のままな感じ」、「普段の生活感が見える」等の理由で土や石積みでできている擁壁を選んでいる。それに対して、コンクリートでできている擁壁を「近代的」、「自然を感じない」、「殺風景」等の理由で「阿蘇らしくない」と選んでいることが分かった。

#### 3.2 KJ法と印象軸を用いた「阿蘇らしさ」の評価

自由記述式回答の分析により「自然性軸（自然的—人工的）」、「素材性質軸（自然素材—人工素材）」、「時代軸（昔—現代）」、「特性軸（特徴的—一般的）」の4つを主要印象軸として抽出することができた。

### 3.3 観光客の景観の見方

観光客は道路景観を判断する時に道路構造物だけではなく、周辺の要素を含めて一つの風景として判断を行う。

### 4. まとめ

これらの結果から、観光客が道路風景を見た時に道路構造物だけに注目するのではなく、周辺との馴染み、風景全体から感じる印象等に基づいて「阿蘇らしさ」を評価していることが分かった。また、観光客は現在広く採用されているコンクリート造の道路擁壁よりも、土や石材で作られた道路擁壁を阿蘇らしいと感じることが分かった。

しかし、現在一般に作られる道路擁壁の中では観光客が「阿蘇らしくない」と評価した道路擁壁が多く、公共土木事業の体系では道路擁壁はコンクリート構造物とすることになっている。さらに言えば、擁壁を道路拡幅や災害対策の目的で新しく道路を整備する際に観光客が「阿蘇らしい」として評価した擁壁を壊して「阿蘇らしくない」と評価した擁壁に作り直すのが道路整備の現状である。

この体系を再考しなければ、今後道路拡幅や多発する自然災害による復旧事業など原因で阿蘇の道路風景は「阿蘇らしさ」を失っていく可能性が高いと考えられる。そこで、阿蘇の道路景観をより「阿蘇らしい」ものにしていくためには、道路の機能性と経済性だけに注目するのではなく、観光客の感性にも配慮する必要があると考えられる。

### 5. おわりに

本研究は今後、阿蘇の美しい文化的景観の保全や魅力的な観光地づくりに少しでも役に立てることを願う。ただし、本研究では道路擁壁のみを対象としているが、道路景観の改善には、道路付属物や道路の線形、沿道景観等様々なことについて総合的に検証していく必要がある。今後は、道路擁壁に限らず今後の阿蘇の道路景観の在り方について専門家、住民、行政等関係者全員が参加できる場を作り、感性的な視点を含んだ合意形成を行っていく必要であると考えられる。さらに、合意形成をしていくにあたり阿蘇特殊な公共土木事業の在り方または、道路に限らず阿蘇全体の風景を対象に「阿蘇らしさ」関係をもっと深く議論していくことが望ましいと思う。